

事例2 日本史B

1 研究テーマ 「ワークシート」学習を使用した考えさせる授業の試み ～「自ら学ぶ力」の把握方法の工夫～

2 テーマ設定の意図

学習指導要領には、日本史Bの目標として「我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立って総合的に考察させ」とあるように、地理歴史科の授業において、生徒に考えさせることは重要である。しかし、現在の高校日本史の授業では、いわゆる講義形式が一般的であり、なかなか生徒にじっくりと考えさせる機会がない。本事例では、ワークシートを使用した作業的、体験的な授業を展開することで生徒に「思考」させ、それをもとに新たな発見や疑問点を見つけさせて関心・意欲の高まりを引き出して、「自ら学ぶ力」の育成を試みた。さらに、観点別評価や評価規準の考え方を援用して、ワークシートの記述などを分析することで、その適切な把握を意図した。

3 調査研究の内容

(1) 関心・意欲を高めるための具体的方策

開国から明治維新までを一つの単元として取り扱った。その中で、次のような学習内容ではワークシートを使用し、生徒に作業させ、考えさせようとした。その際、学習前に、あらかじめ期待される「疑問点」や「調べてみたい点」（その一例は本節末尾）を想定し、それらが導き出されるように授業を工夫した。

ア ペリー来航に関する学習でワークシートを使用した。中学校までの学習でも扱われる、ペリーの航路などについてさらに詳しく取り上げることで、ペリーやアメリカの外交について、新たな発見や疑問点を見つけさせようとした。

イ 幕末の貿易に関する学習でワークシートを使用した。幕末の貿易に関するグラフを読み取り、その内容を考察させるなどの工夫をした。イギリスとの貿易が進められた理由や、貿易開始後の日本国内の様子、日本の開国をリードしたアメリカとの貿易状況についての疑問点を見つけさせようとした。

この他、ワークシートを使用しない授業でも、パネル（写真）を使用し、発問を多くすることで、生徒の興味・関心を高めようとした。

これらを通して、単元の学習により積極的に取り組ませ、最後に新たな発見や疑問点、今後調べてみたいことを記入させた。

(2) 「自ら学ぶ力」を把握する手立て

「自ら学ぶ力」を測る手立てとして、ワークシートを使用した授業の最後に「疑問点」や「調べてみたい点」を書かせ、その記述内容を分析した。その際、観点別評価の考え方を援用して、あらかじめ作成した具体的な判断の規準をもとに、記述内容を分析、把握する方法をとった。また、1時限の授業のほかに、単元のまとまりとしての学習から、単元の最後にも「疑問点」や「調べてみたい点」を生徒に記述させた。これらの記述内容についても、1時限と同様に分析、把握するとともに、その結果を1時限のものとは比

較した。

○ 期待される「疑問点」「調べてみたい点」の例

第1時 日本の開国

- ・イギリスがなぜアメリカ蒸気船の補給に協力したか
- ・アメリカの捕鯨の歴史について
- ・太平洋を横断した場合の時間と、石炭の消費量 など

第3時 貿易の開始・公武合体

- ・貿易相手国の1位がイギリスの理由
- ・なぜ「生糸」の輸出が多かったのか
- ・和宮は、明治維新後はどうなったのか など

4 実践事例

(1) 単元名 「近代への転換（開国・明治維新）」（6時間）

(2) 単元の目標

- ア** 日本開国の世界史的背景に留意しながら、開国の衝撃を契機として幕末の政治的激動が進行した過程を理解させる。
- イ** 討幕派の形成から幕府の滅亡に至る政治過程と、明治政府による中央集権体制の確立過程について理解させる。
- ウ** 授業を通し単元の「知識・理解」を深めた上で、単元に関連する新たな「関心・意欲」を喚起させる。

(3) 授業の展開

ア 指導計画

第1時 日本の開国

	学習内容	主な学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 10分	●ペリーについて 復習	○写真を見て、ペリーを確認する。 ワークシートに、ペリーに関する ことで、知っていることを書き出 す。		
展開 35分	●ペリー来航	○ペリーについて知っていること を発表する（資料3）。 ○ワークシートに「黒船」をか く（資料3）。 ○ワークシート（資料2）世界地 図に、ペリーの日本への航路を記 入する。 その後、（資料1）を見ながら、実 際の航路を記入し、なぜ中国経由 で来航したかを考える（資料3）。	・中学校での既習事項を確認 する。 ・「黒船」は4隻で来港し、 蒸気船はうち2隻で、マス トもあったことに気付かせ る。 ・米大統領フィルモアの国 書（資料1）を読ませ、中 国経由の理由と開国を求め た理由を読み取らせる。そ の際、捕鯨が重要な産業で あったことも、理解させる。	■資料を用い、理由 を推測することがで きる。 →回収したワークシ ートを評価

		○アメリカが日本に開国を求めた理由をまとめる（資料3）。		
まとめ 5分	●本時のまとめ	○ペリーについて、①初めて知ったこと、②ペリーやこの時代の他の人物（ハリスなど）、出来事について調べてみたくなったことや知りたくなったことを書く（資料3）。	・本時の内容を振り返りながらまとめるよう促す。	■課題に関心を持ち、意欲的に取り組んでいる。 →回収したワークシート（資料3）を評価①

第2時 安政の政局

	学習内容	主な学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	●前時の復習	○ペリー来日の理由を確認する。		
展開 40分	●日米和親条約 ●日米修好通商条約	○日米和親条約について学習する。 ・下田・函館を地図で確認する。 ・日露和親条約で国境策定がされたことを学習する。 ○日米修好通商条約について学習する。 ○将軍継嗣問題・桜田門外の変など安政の政局について学習する。	・地図で下田・函館及びロシア国境を確認させる。 ・文書資料を読ませ、不平等な点を確認する。 ・幕府の分裂と絡んで、国政局が混乱したことを理解させる。	
まとめ 5分	●本時のまとめ	○様々な意見がある中で、条約が締結された日本が国際社会と、政治的経済的に関わりを持つようになることを確認する。	・本時の内容を振り返りながら概観する。	

第3時 貿易の開始・公武合体

	学習内容	主な学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	●不平等条約について復習	○不平等条約について復習する。		
展開 35分	●貿易の開始	○貿易開始直後の様子を示したグラフを読み取る（資料4）。 ○五品江戸回送令について学習する。 ○金の大量流出の理由を考える（資料4）。 ○公武合体（和宮降嫁）について	・グラフを読み取る際に、時間をとり、特に品目から貿易の影響を考えさせる。また、貿易が国内産業に打撃を与えたことに気付かせる。 ・従来の流通機構が崩れたことに気付かせる。 ・金の交換比率が国内外で異なったことに気付かせると同時に、貿易の開始により経済が混乱し、社会不安が高まったことに気付かせる。 ・幕府の権威回復を意図し	■資料を用い、影響や、理由を推測することができたか。 →回収したワークシートを評価

		学習する。	だが、効果は少なかったことに気付かせる。	
まとめ 10分	●本時のまとめ	○幕末の貿易について、初めて知ったことや、他に疑問に思ったことをことごとく書く（資料4）。	・本時の内容を振り返りながらまとめるよう促す。	■課題に関心をもち、意欲的に取り組んでいる。 →回収したワークシート（資料4）を評価②

第4時 尊攘運動の全盛と挫折

	学習内容	主な学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	●前時の復習	○貿易により経済混乱が、尊攘運動や幕府権威失墜に繋がったことを確認する。		
展開 40分	●公武合体派の動きと尊皇攘夷運動（発問）パネルを使用し、イギリス船の形はどのようなものか。 （発問）薩摩藩と長州藩の共通点とは何か。	○薩摩藩の文久の改革、薩英戦争を学習する。 ○長州藩を中心とした尊攘運動の展開と、薩摩藩を中心に公武合体派の巻き返しを学習する。 ○四国連合艦隊下関砲撃事件を学習する。	・薩摩藩が公武合体の立場で動いていたことを理解させる。 ・薩摩藩は敗北したことに気付かせる。 ・禁門の変や第一次長州征伐で公武合体派が優勢になったことに気付かせる。 ・四国連合艦隊下関砲撃事件での敗戦を受け、薩摩・長州両藩とも、対外戦争での敗戦を機に攘夷不可能と倒幕へ転換したことに気付かせる。	
まとめ 5分	●本時のまとめ	○攘夷の不可能と近代化の必要性に気付いた薩長が倒幕へと転換することを予告する。		

第5時 大政奉還

	学習内容	主な学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 10分	●西郷隆盛・高杉晋作・坂本龍馬について中学校の知識を復習	○西郷・高杉・坂本について、知っていることを発言する。	・三人のパネルを利用し、知っていることを発言させ板書し、授業内容を予告する。	
展開 35分	●薩長同盟 ●大政奉還	○薩長同盟について学習する。 ○資料を読み、大政奉還について学習する	・近代化の必要性から、薩長が倒幕に合意したことに気付かせる。また、坂本龍馬や志士が活躍したことに気付かせる。 ・武力討幕派と旧幕府側の連合政権との差を理解させる。	

	(発問)「公議を 尽くす」の意味を 考えよう。 ●王政復古 (発問)「三職」 に徳川慶喜が入っ ていない理由を考 えよう。	○資料を読み、王政復古について 学習する。	・武力討幕派のクーデタだ ったことを理解させる。	
まとめ 5分	●本時のまとめ	○近代化の必要性から、雄藩が倒 幕へと結束したことに注意しなが らまとめる。		

第6時 新政府の成立

	学習内容	主な学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	●大政奉還につい て復習	○大政奉還について復習する。		
展 開 30分	●戊辰戦争 ●新政府の成立 ●廃藩置県	○五稜郭のパネルを見て、戊辰戦 争を学習する。 ○資料から「列侯」とは何かを考 え、五箇条の誓文をまた五榜の掲 示などを学習する。 ○廃藩置県について学習する。	・戊辰戦争は1年半続き、 これに勝利して新政府が確 立したことを気付かせる。 ・新政府が脆弱であり、方 針も過渡的であったことを 理解させる。 (発問)「列侯会議」から 「広く会議を」に変更され たのはなぜか。 ・中央集権が進められ、統 一国家の基礎が確立したこ とを理解させる。また、資 料から薩長の勢力がいかに 強かったかに気付かせる。	
ま と め 10分	●本時のまとめ	○ペリーの来航から明治維新まで を概観し、疑問点や調べてみたい 点をまとめる(資料5)。	・単元の内容を振り返りな がらまとめるよう促す。	■課題に関心をもち、 意欲的に取り組んで いる。 →回収したワークシ ート(資料5)を 評価③

イ 期待される「疑問点」「調べてみたい点」

第1時 日本の開国

- ・イギリスがなぜアメリカの補給に協力したか
- ・アメリカの捕鯨の歴史について
- ・太平洋を横断した場合の時間と、石炭の消費量 など

第2時 安政の政局

- ・条約を締結しなかった場合日本はどうなったか
- ・ハリスの交渉の様子
- ・一般庶民は外国の脅威を知っていたのか など

第3時 貿易の開始・公武合体

- ・貿易相手国の1位がイギリスである理由
- ・和宮は、明治維新後はどうなったのか など

第4時 尊攘運動の全盛と挫折

- ・なぜ長州藩では尊攘運動が盛んだったのか、またその他の藩の状況は
- ・孝明天皇は、幕府や長州藩をどう思っていたのか
- ・新撰組について など

第5時 大政奉還

- ・西郷隆盛、高杉晋作、坂本龍馬などの生い立ちの詳細
- ・岩倉具視と明治天皇との結びつきについて など

第6時 新政府の成立

- ・戊辰戦争に負けた大名や武士のその後
- ・天皇がやってきたときの江戸市民の反応 など

(4) 具体的な判断の規準

	「十分関心・意欲が高まったと判断される」状況(A)	「関心・意欲が高まったと判断される」状況(B)
①第1時 (開国)	イギリスがなぜアメリカの補給に協力したかなど、この時間の学習を踏まえた疑問点が出ている	蒸気船とは外輪船だったなど、この時間の知識や理解と結びついた、新たに知った点が出ている
②第3時 (貿易)	貿易相手国の1位がイギリスである理由など、この時間の学習を踏まえた疑問点が出ている	最大輸出品目が生糸だったなど、この時間の知識や理解と結びついた、新たに知った点が出ている
③第6時 (単元のまとめ)	アメリカの捕鯨の歴史についてや戊辰戦争に負けた大名や武士のその後など、単元の学習を踏まえた疑問点が出ている	公武合体の動きや公儀政体の考えなど、この単元の知識や理解と結びついた、新たに知った点が出ている

5 分析と考察

生徒のワークシートの記述をまとめたものが、**資料6**である。これをもとに、次の(1)、(2)について分析、考察する。

(1) 興味・関心の把握について

ア 1時間ごとのワークシート

第1時「日本の開国」と第3時「貿易の開始」は、1時間ごとにワークシートに「初めて知ったこと」「知りたくなったこと」を記述させた。第1時「日本の開国」の場合は2件、また第3時「貿易の開始」は10件であった。第1時「日本の開国」については、ワークシートで作業を通して生徒に考えさせたが、内容が多くかえって生徒は理解するのに手一杯で、新たな疑問を見いだすゆとりがなかったものと考えられる。また、当日記述の時間を十分にとれなかったという反省点もある。第3時「貿易の開始」では、「期待される疑問点」であげた「最大貿易相手国がイギリス」に関する点をあげた生徒が2名いた。その他8名中6名が授業内容を踏まえた上での「新たな疑問」をあげていた。この時間ではある程度生徒の「関心・意欲」を高めることができたと言える。

イ 単元のまとまりを学習した後のワークシート

単元6時間の授業を実施した後で資料5に回答させ、その回答状況を資料6「単元のまとめ」欄にまとめてある。記述内容を問わずに、第1時と第3時に関連する事項は23件ある。そのうち、「初めて知ったこと」として記述したものが19件であった。内訳はペリーに関するものが5件、イギリスが最大の相手国だったことなど貿易に関連するものが5件、金銀交換比率関連が9件である。これを広い意味で「関心・意欲」が生まれたととらえれば、興味・関心が高まったと言える。また、「疑問点」・「関心を持った点」では、「なぜ米英が昔から強かったか(1)」、「金銀交換比率の違い(2)(30)」「ペリー(25)」の4件であった。このうち(1)(30)の生徒は、第3時の「疑問点」での記述はない。同様に「初めて知ったこと」で記述がある生徒のうち、第3時に記述がなかったものは18名中12名である。これらは単元を通しての学習を終えた後で学習内容の振り返り作業を通し、内容の整理や理解を深めたと言えるであろう。

こうした事例から、生徒は一つの歴史的事象を、他の多くの事象と関連付け、歴史の流れの中で、疑問点や課題を見いだしていると言える。「自ら学ぶ力」につながる生徒の「関心・意欲」は、定着1時限の学習より単元のまとまった学習を通じ、基礎的な知識の定着を基盤として喚起されるものと考えられる。

なお、1, 3時での内容と同様の記述を単元のまとめでも記述した生徒はいなかった。ワークシートに記述させた次の授業で、主な疑問点を生徒に紹介し、簡単な解説を加えていたためだと考えられる。また、ワークシートを使用しなかった時間の項目をあげた生徒は17名であった。回答数の単純比較だが、ワークシートに使用が生徒に良い影響を与えたと言えるであろう。

(2) 期待される「疑問点」、「新たに知った点」について

ア 期待される「疑問点」

今回の実践では、判断規準の「十分関心・意欲が高まったと判断される」状況(A)を、『時間や単元の学習を踏まえた「疑問点」が出ている』とした。例えば「アメリカの捕鯨の歴史」ならば現在の捕鯨問題に関連付けた生徒の主体的な学習が、また「貿易相手国がイギリス」ならばアメリカ南北戦争という当時の国際情勢を学習することが可能である。さらに「なぜ生糸の輸出量が多かったのか」ならば、南蛮貿易の輸入品目としての生糸と近代の輸出品目としての「生糸」というそれまでの授業の復習や、今後の予習としての視点、またテーマ学習としても期待できる。このように生徒の新

たな「興味・関心」に基づく自発的な学習を促すことから、「疑問点」を想定することは重要である。あらかじめ想定した「疑問点」をあげた生徒が少なかった点においては、生徒の気づきへの支援にさらなる工夫が必要である。もちろん、想定外の疑問点をあげた生徒についても、この時間・単元の学習を踏まえたものであれば、評価をAとした。これらの疑問点を生徒にいかに戻し、その後の授業に活用するかも課題として残る。

イ 「新たに知った点」

判断規準の「関心・意欲が高まったと判断される」状況(B)を、『時間や単元の知識や理解と結びついた「新たに知った点」が出ている』とした。ペリーに関する第1時の記述が2名だったのに対し、第6時での「単元のまとめ」では第1時の内容に関するものが6名(1)(3)(8)(9)(25)(28)となり、知識の定着はある程度進んだと言える。しかし、この6名は「疑問点」や「関心をもった点」では十分な内容の記述とは言えない。知識の定着から、「関心・意欲」の萌芽という次の段階へ進ませるための生徒への支援が求められる。

6 実践校における成果と課題

(1) 成果

- ワークシートを使用した学習については、生徒の思考を進め積極的に授業に取り組む姿勢がみられた。じっくりと考えることを通して内容を理解し、関心・意欲が高まったと言える。
- あらかじめ「疑問点」を想定した授業を展開することで、前後の授業との関連性や理解を深めたり、生徒の主体的な学習を促すことができる。
- 自ら学ぶ力につながる「関心・意欲」は、学習内容に関する基礎的な知識を基盤として、単元のまとまった学習を通じて高められると考えられる。

(2) 課題

- 生徒から出された「疑問点」をどう授業に活用するかを検討する必要がある。生徒の関心や疑問点をフィードバックし、グループごとに討論をさせるなどしてお互いが教えあい、解決していくことも方法の一つであろう。こうした振り返りは、評価BやBに満たなかった生徒の興味・関心の喚起にもつながる。
- 今回の実践結果の生徒からの「疑問点」は決して十分なものとは言えなかった。「疑問点」を導き出させるための、授業やワークシート、発問の工夫が不可欠である。また、ワークシートの記述内容のより詳細な分析も必要であろう。
- 実践にもあったように、生徒に作業や思考をさせるには、十分な時間が必要である。限られた時数で取り組むには、年間指導計画をはじめ、授業計画をよく検討することが重要である。